

終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究

— 幼稚園を中心に —

*An Empirical Study on the Early Childhood Education and Care before and after the
End of World War II
— Focuses on Kindergarten —*

豊田 和子 *Kazuko Toyoda*

(人間発達学部)

清原 みさ子 *Misako Kiyohara*

(愛知学泉短期大学)

寺部 直子 *Naoko Terabe*

(愛知学泉短期大学非常勤)

榊原 菜々枝 *Nanae Sakakibara*

(名古屋文化学園保育専門学校)

はじめに

筆者たちは、平成27年度から29年度に科学研究費（基盤研究 (C)15K04334）の助成を受けて、「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究」に取り組んでいる。幼児教育・保育の現場が、戦争をどうとらえていたのか、敗戦をどのように受け止め、戦後の歩みを始めたのか明らかにすることを目的に、戦前に設立され現存する幼稚園・保育所（こども園になっているところを含む）を対象に、資料の有無を尋ねるアンケート調査を行った。保育の実際を明らかにするため、保育日誌・園日誌等の記録が残されている園を優先して訪問しているが、日誌類が保管されている幼稚園・保育所は多くはない。

日誌が残されていても、園日誌である場合は、その日の天候や出席数、行事、来訪者等の記入はなされていても、日常の保育に関する記述はわずかしかなされていない。都市部では幼稚園閉鎖令が出されて休園になっていたり、戦時託児所に転換したりしている。また、敗戦の8月15日は夏休み中ということもあって、記述そのものがなされていない場合もある。資料に限りはあるが、7つの幼稚園の事例をとりあげ、1. 行事、2. 保育内容、3. 研究・研修、4. 保育者の思い、5. その他に分けて、日誌を中心に分析する。

本稿で取りあげるのは、公立では、明治21年設立の高梁市立高梁幼稚園（【高梁】、以下同様）、明治23年設立の北九州市立小倉幼稚園（【小倉】）、明治26年設立の京都市立小川幼稚園（【小川】）、昭和9年設立の港区立南山幼稚園（【南山】）、私立では、名古屋市にある明治30年設立のキリスト教の堅磐信誠幼稚園（【堅磐信誠】）、京都市にある明治34年設立の仏教の常葉幼稚園（【常葉】）、昭和16年設立のキリスト教の江戸川双葉幼稚園（【江戸川双葉】）の、合計7園である。取りあげる年度を、昭和15、19、20、21年度としたが、その年度の日誌がない場合は、前後の年度のものを用いている。

対象園の概要は以下の表のとおりである。

| 園名(幼稚園) | 所在地 | 設立年 | 公私 | 対象とした日誌の年度 |
|---------|---------|-------|-----------|----------------|
| 高梁 | 岡山県高梁市 | 明治21年 | 公立 | 11、19、20、21 |
| 小倉 | 福岡県北九州市 | 明治23年 | 私立→公立 | 15、19、20、21 |
| 小川 | 京都府京都市 | 明治26年 | 公立 | 15、19、20 |
| 南山 | 東京都港区 | 昭和9年 | 公立 | 15、18、19、21 |
| 堅磐信誠 | 名古屋市 | 明治30年 | 私立(キリスト教) | 15、19、20、21 |
| 常葉 | 京都府京都市 | 明治34年 | 私立(仏教) | 15、19、21 |
| 江戸川双葉 | 東京都江戸川区 | 昭和16年 | 私立(キリスト教) | 16、17、19、20、21 |

※設立年は、前身となる保育園なども含めた

以下、本文中に出てくる日付は、対象園の保育日誌に記載された日付である。

1. 行事

戦前戦後を通してほぼ共通に行われていた行事は、入園式・卒業式(修了式、卒園証書授与式)や始業式・終業式であった。以下にその内容がわかる記録を示すことにする。

【常葉】で19年に行われた入園式の記録には、「出席者91名、本日午前10時より入園式を行ふ 来園者 園長 岡田 クレオン (30) ハサミ (49) ヌリエ (35) 自由画帳 (25) お道具箱 (25) 園児一同に園章二枚ずつ与ふ 青組園児遊戯をなす 僕は軍人 飛行機 お星 お砂のトンネル 新入児77、男41、女36」とあった。【小川】で20年に行われた保育修了式は、「1. 着席 2. 挙式の旨告げ 3. 君が代 4. 修了証書授はい 5. 皆勤賞授与 6. 記念品授与 7. 園長のお話 8. 在園児代表挨拶 9. 修了児代表挨拶 10. 保護者代表挨拶 11. 修了式の歌 12. 閉式の旨を告ぐ 修了児 男14名 女21名 計35名 記念品‘筆箱’ 修了児 ‘自由画帳’ 在園児」との記述があった。【南山】の15年9月の始業式は、「午前八時半始業式挙行 一、敬礼 二、君が代 三、宮城遙拝 四、皇軍武運長久を祈る黙祷 五、園長先生訓話 六、敬礼 式後防空演習の御はなしをなす」とあり、【江戸川双葉】は、当時戦時託児所だった20年4月の記録に、「4月7日(出空襲のため始業式中止)」「4月9日(月) 出席児13 1、2年6 幼7 式中警報もなく」とあり、式を延期したとみられる。

天長節は、戦前は一部記述のない年もあったが、全園で行われていた。【常葉】の19年の記録には、「祝拝 君が代 宮城遙拝 お話 天長節の曲 園児一同に日の丸国旗一本ずつ与ふ」とあった。明治節は、休日であった【江戸川双葉】以外の園では行われていた。【小倉】の19年の明治節奉祝に関する記述をみると、「午前八時半 全園集会 奉祝式を行ふ 一、敬礼 二、開扉 三、君ヶ代奉唱 四、明治節のお話 五、明治節の歌 六、閉扉 七、敬礼」とあり、その内容がわかる。これらの儀式は、20年以降は行われなくなっていくが、【高梁】【小川】では20年まで明治節の儀式が行われ、【常葉】では21

年にも天長節拝賀式が行われていた。【南山】では、天長節、明治節、教育勅語の記念日などの儀式には小学校（昭和16年以降は国民学校）低学年とともに参加という記述が多く、明治節に関して、21年に「明三日憲法発布と明治節のおはなしをなしお式のない事をおはなしする」との記述が残されていた。

「紀元二千六百年行事」に関しては、この記念日に当たる日誌が残されている園では、全て行われていた。【小倉】では、「紀元二千六百年奉祝日 子供と共にお祝ひす 天にとどけとの万歳の声 よろこばしきかぎり 午前中にておかえりする ラヂオにて実況放送を伺ひ涙する」との記述があった。

宗教行事に関しては、キリスト教の【堅磐信誠】ではクリスマスが19年以外の年は記述が残されており、【江戸川双葉】では16年と戦後の20年から記述が残されていた。【江戸川双葉】の16年12月25日の日誌には、「快晴に恵まれてほんとに主の降誕を祝す 御祝日であった。十時に開会。永島氏司会 第一部はクリスマス礼拝をなす 第二部は幼児の唱歌、遊戯等、一ヶ月足らずの保育であったけれど、よく覚えて上手にやってくれた。ほんとうにうれしかった。お母様たちの御気持ちはどんなであったろうか。一学期も無事に終了」とあり、11月29日に開園してから1か月で行事の準備に取り組んできたことがわかる。【堅磐信誠】の20年度の日誌では、その二週間前から「聖句の暗唱」「お母様へのプレゼントの製作」「献金用の貯金箱の製作」などの準備が行われていたことがわかる。仏教の【常葉】では、花まつりが毎年行われていた。21年5月の記録によると、「本日午後一時より花祭まつりと母の会を開催 来園者 園長 礼拝 灌佛 讃佛歌 お話 花まつりの歌 園児一同に提灯を与ふ 汽車 結んで開いて 三ヶ月様 だるまさん 先生お早う 金魚（以上 竹組） 鯉のぼり 指の歌 象のお鼻 手をたたきませう 金太郎 チュウリップ（松組）」とあり、花まつりと母の会が同日に開催されていた。

その他によく記述のみられた行事として、遠足（園外保育）、七夕祭、運動会（体練会）、節分（お豆まき）がある。遠足は、動物園や神社、お城等へ出かけていたようである。遠足に関する記録は、【江戸川双葉】の21年10月に、「遠足（97名）お母さん達は三十五・六名参加 九時半出発。柴又帝釋様で一休みして土手に行って昼食 少し休んで徒競走……少々ごほうび皆大喜び。一時に出発 二時に無事に帰園」とあった。七夕祭は、【南山】の15年に、「幼稚園運動場に七夕祭の御笹をたてて、木蔭に一人椅子を各自運び七夕祭をなす。時間も順調にすすみ各組の製作の御笹を持って帰る。（明日は事変記念日、訓話して帰す）」との記録があった。

運動会は、小学校の運動会に参加したり、自園で行ったりしていた。【小川】の15年度の運動会は、「紀元二千六百年教育勅語渙発五十年奉祝記念運動会」として10月8日に小学校で行われたものに参加し、徒競走、二千六百年奉祝歌、体操を行っていた。19年度には、国民学校の体錬大会で旗取りや遊戯をしている。運動会の演目は、【高梁】では、11年度には「兜、お星様、日の丸行進曲、紅葉 落葉、黄金の鈴」、20年度は「シロバト

サン・モミヂ、サヨナラアバヨ、お米、タンポリンダンス」、【常葉】では、15年度には「おはようさん、紀元二千六百年」、戦後は、「徒歩競走、綱引、遊戯、輪取り、スプーンレース、遊戯合同、お土産拾ひ」との記述が残されている。

節分は、【江戸川双葉】の19年に、「豆を煎って鬼にぶつけさして節分の意味をわからせる」と書かれていた。

2. 保育内容

(1) 保育内容の記述について

保育内容が、項目別に記述されていたのは、【堅磐信誠】と【江戸川双葉】（昭和18年度）の2園のみであった。【堅磐信誠】の項目は、「歌唱」「遊戯運動」「手技」「談話」「観察」であった。【江戸川双葉】の日誌は、「保育予定案」と「保育日誌 附＝研究事項」の欄があり、「保育予定案」は、「談話」「手技手工」「運動遊戯」「唱歌」「観察」「その他」の項目にわけられていた。18年度以外は、既成の用紙ではなく、普通のノートにその日の出来事を記入しているものであった。

【小倉】は、記入欄が小さく、会集の担当者名や、立案保育、集会、行進、遊戯、唱歌等の記述はされていたが、具体的な内容は書かれていなかった。【高梁】は、行事以外では園外保育の行き先が書かれているだけで、日々の保育の具体的な内容はほとんど書かれていなかった。敬老会や学芸会等のプログラムで園児が披露した遊戯あるいは唱歌の題名が書かれている程度である。【小川】の昭和15年度の保育日誌は、自由記述欄が上下に分割されており、上段にその日の出来事が保育の内容も含め記入されていた。19、20年度には「保育」という欄があり、時系列で項目や活動の概要が記入されていた。【南山】は、「園日誌」であり、「記事」の欄に、「集会」（昭和15年度）、「会集」（18、19、21年度）の内容は多く書かれていたが、各組に分かれての保育の具体的な内容についてはあまり書かれていない。21年度再開当初は1クラスであったためか、手技などの具体的な内容が多く書かれていた。【常葉】は、表紙には「日誌」と書かれているだけで、罫紙に日付、出席人数、行事等を中心に記述してあり、日々の保育内容についての具体的な記述はほとんどなかった。【高梁】と同様行事のプログラム等から遊戯や唱歌の題名がうかがわれる程度である。

(2) 戦前戦後の保育内容の比較

手技については、記録のあった園に関しては、戦前戦後を通して、季節や行事、日常生活に関するものを題材にして製作を行っていることは共通していた。【小倉】では、提灯、菊の花、凧など、【小川】では、七夕祭りの飾り、カルタ、節分の鬼や福の神、お雛様、【南山】では、時計、七夕飾り、盆提灯、鶴亀の折紙つきの七五三の飴袋、お雛様、【堅磐信誠】では、つばめ、時計、木の葉を利用した製作（19年10月26日に「時局下保育用紙

も容易に入らぬ時ながら自然物を利用すればまだまだ充分楽しむには足りる保育計画も立てられる」との記述有り)、コマと羽子板、三宝、鬼とお多福、お雛様、【江戸川双葉】では、時計、鬼、カエル、魚/金魚、お菓子入れ/三宝、セミ、カラス、菊、ナスビ、兎と月、リンゴ、犬/子犬などであった。同園では、戦前には、高射砲・タンク、キビガラ飛行機、新聞紙飛行機などの記述があったが、戦後にはみられなくなった。他の園でも同様に戦後には、戦争に関するものの製作をしたという記述はみられない。ただし、自由画については、日誌等の記述からはどんな内容の絵が描かれていたかは確認できないが、【江戸川双葉】に残されていた戦後の幼児の絵には戦艦や飛行機が描かれているものもあった。

歌や遊戯に関しても同様である。例えば、【堅磐信誠】では、唱歌については、昭和15年度には、賛美歌と一般的な唱歌がほとんどという中に「兵隊さんありがとう」「僕は軍人」などの歌が散見されるだけであるが、19年度になると賛美歌の記述はあるものわずかになり、前述の歌に加えて、「鉄砲かついだ」「大詔奉戴日」「大将さん」「軍艦」「航空日本」「防空演習」「潜水艦」「進めみくにの子供」というような歌が繰り返しみられる。戦後は、戦争を感じさせるものは一切なくなり賛美歌が多くなった。【常葉】の「母の会」の記録には、「母の会」のプログラムが記載されていた。そこに園児が歌った唱歌の題名が書かれていたが、そこにも、戦前については多くの戦争に関連する歌が記載されていた。昭和15年12月と21年12月のプログラムを比較してみると、共通に歌われていたものは「紅葉」「南京玉」「俵はごろごろ」であった。15年のプログラムには「兵隊さんありがとう」「偉いわね軍用犬」「紀元二千六百年」「みくにの子ども」「白衣の兵隊さん」「興亜進行曲」という曲目がみられるが、21年のプログラムにはこのような曲目はみられない。

戦争末期から戦後にかけて変化があったのは、観察である。【小川】では、15年度も19年度も園外保育で田植え、麦打ちの観察をし、また園でも田植えをし、麦も植え、キュウリなどの野菜を育てていた。生き物に関しては、15年度には、園の池で金魚、おたまじゃくし、めだかを育て観察していた。7月には金魚が卵を産み、そこから稚魚がかえり「金魚の子元気である。みんなに観察させる。子供達大喜びである」(13日)という記述もあったが、19年度にはそのような生物の飼育観察に関する記述はみられなかった。戦後は観察に関する記述そのものがなかった。【南山】でも、15、18年度には、朝顔を栽培し、18年度には金魚を飼っていたが、戦後は幼稚園で生き物を飼っているという記述はみられなかった。【堅磐信誠】でも、15年度にはおたまじゃくしを観察しており、6月には「おたまじゃくしが可愛い蛙になりぴょんぴょん飛ぶようになった」とあるが、19年度にはやはり生物に関する観察の記録はなかった。20、21年度についても同様であった。

遠足以外の園外保育については、変化のみられた園となかった園がある。【小川】では、15年度には、日常の保育の一環のように、盛んに「園外保育」に出かけていたが、19年度にはほとんど出かけていない。15年度には、「御所」「妙覚寺」「植物園」など16回も園

外に出かけている記述がある。「園外保育」と書かれている場合、園長と保護者会の二人の幹事が付き添っており、また、数名の保護者が付き添っていたという記述もあった。19年度は、「園外保育」としては、6月「三宅八幡（田植麦打ち等観察）」、10月「北野神社」の2回の記述しかなかった。同じ京都の【常葉】は、戦前は、組ごとに稲荷神社や動物園、護国神社、豊国（とよくに）神社などに出かけているが、戦後には園外保育に関する記述はなかった。【高梁】は、19年度にも20年度の7月末までにも、月に数度「薬師院」「定林寺」「八重籬神社」「八幡様」「道源寺」「五衛門稲荷様」などの寺社仏閣や河原、山、林などに出かけていたが、戦後の20年度末からも同様のペースで園外に出かけている。

談話については、記述の多かったのは、【堅磐信誠】【江戸川双葉】である。【堅磐信誠】の日記の「談話」の欄の記述のうち、戦前・戦後ともに記入されていた談話や紙芝居は、「聖話」と書かれていたもの、書かれてはいなかったがそれと推察できるものは、「羊飼いたち」「12歳のイエス」「ダビデとゴリアテ」「悪鬼に憑かれた人をイエスが癒した話」「サムエル」「ダニエル」「マリヤ」「よきサマリア人」、童話では「ピーター兔」「舌切り雀」「北風と太陽」、主題話や訓話、生活話と書かれていたもの、行事や季節に関するものでは「動物の冬支度について」「遠足のお話」「お正月の思い出」「七五三」「落ち葉」であった。「キリスト教に関する話」は、戦前戦後を通して記述があり、15年度が一番多かった。19年度は、「モーセ」という記述が7回、その他に、「モーセの祈り」、「ダビデとゴリアテ」という記述があった。戦争に関連する談話・紙芝居は15年度に、「防空演習について」「兵隊さんについて」、19年度に「戦局談」と書かれていたことが2回あり、その他に「お勅語について」「海軍記念日について」「航空日について」「落下傘」「陸軍記念日」という記述があった。「神武天皇」は紙芝居で、昭和20年と21年の2月に記述があった。【江戸川双葉】では、戦前・戦後ともに記入されていたもののうちキリスト教に関連するものは、紙芝居では「ダビデ」「ザアカイ」「ヨナ」「イエス伝」、「お話」として記述されているものでは、「ヨセフ」「イエスの奇蹟」「エンリコ」「モーセ」であった。その他には、紙芝居では、「新ちゃんと赤トンボ」「タヌキのテンバツ」「アシノクキ」「お山のトナリグミ」「桃太郎」「一寸法師」「虎ちゃんの飛行機」で、「お話」では「手白猿」「三匹の子豚」「太郎さんの夢」「カチカチ山」「毛虫の祈り」であった。戦前にみられた戦争に関するものは、昭和16年度に「陸海空軍」「兵器」の「お話」、19年度に紙芝居の「うちてしやまん」、20年度の終戦前に紙芝居「どん栗山の出征」、「天長節と日本の国体」「日本海々戦」の「お話」であった。

幼児に向けて語られた戦争に関する話の内容は、【小川】【南山】の記録の中にみることができる。【小川】では、昭和19年度に多くの記述がみられた。「泣く子は米英の子供に負ける」（4月12日）、「泣く子は小さくなる。日本の強い子どもになるように」（4月14日）、「米英の子供に勝つ、我儘がでたらサイパンの子供の事を思え」（7月11日）、サイパン島全員戦死の報道に関して「兵隊さんや住民のご苦勞をしのび小さくともきっとこの

敵を撃とう。サイパン島の人たちの後に続こうと誓う」(7月19日)、「朝礼 台湾島海面における大戦果について幼児と共に大いに喜び今後一層ヨイ子になるよう決心させる 保育 各組に分かれ力一ぱいやりぬき日本の子供の意気を発揮させてあり」(10月18日)、「レイテ島の嬉しい戦局の話と日本の子供の決意をうながす」(12月9日)、「朝礼 京都空襲後のお話。皆のこれからの覚悟」(1月18日)などである。【南山】では生活に関して「戦時下だから」「兵隊さんのことを考えて」という訓話がいくつかみられる。「海軍記念日の御話をなし強い日本の子供になるためにと園訓に結びつけて話し、園訓を暗唱す」(昭和15年5月27日)、「雨の日でも兵隊さんの事を考へ乍らお休みしないことを約束する」(18年6月15日)、「(お弁当に)代用食もよろこんで持ってくる事。勝つために、がまんをする様、おはなしする」(18年10月4日)、「雨が降っても登園する様、戦争は雨が降ってもつづいてゐることから強い子供になる様お話する」(19年4月19日)

保育内容については、手技、歌、遊戯、談話については、記録のある園に関しては、戦前戦後に共通してみられる内容があった。それらは、季節、行事に関するものが多かった。戦前は、保育内容についての記述のある園では、すべての園で戦争に関する保育内容の記録があった。

3. 研究・研修

本節では、保育者が参加したり関わったりした研究・研修にはどのようなものがあったのかについて園ごとに取り上げ、戦前と戦後の比較を行う。

【小倉】では、昭和15年度には、「奈良保育大会(奈良県樫原で行われた全国幼稚園関係者大会)に出席予定」(5月25日)とある。「小学校で行われる講習会」に出席(8月6日)、「小倉支部第一回総合保育講習会」(8月19日から2日間)が開催され、その内容は、講演や手技・遊戯の実技が行われていた。北九州保育会、同会小倉支部が結成されていたことがわかる。その他に「教育報国会結成大会」(12月3日)という記述があった。

19年度には、「天心保育園での研究会」(5月15日)、「富野幼稚園での保育報国会」(6月7日)、「大黒日の丸保育園での県主催の研究会」(6月8日)に参加した。「小倉市保育協議会や幼稚園保育会協議会」(12月1日)という記述があり、12月2日には大日本教育会入会についての説明を小倉・勇金・富野・徳香幼稚園が聞いて、同会小倉支部会発会式に出席した。この年度には、園長がしばしば大日本婦人会の会議に出席したことも記録されていた。20年の敗戦までには、4月に保育会の諸帳簿を持参して市役所へ行っている。農繁期託児所講習会や県立高女での講習会に出席しているが、研究会の記述はみられない。「文化報国会第一回理事会」(7月12日)に園長出席とあり、「文化報国会」があったことがわかる。敗戦直後に米町校での「市内各学校々長会議」(8月19日)、翌日の市役所での会議に、園長が出席した。その内容は記されていないが、いち早く敗戦後の会議が開かれたと思われる。10月以降は「文化会」の記述が何度も登場し、婦人部も発

足している。

21年度にも、「文化会」関連が頻繁に記述されている。「文化会総会」(4月1日)で「欧米夫人と日本女性」の講演を聞き、「電車学校参観」(4月23日)に園長が出席、「観音経の読み方」(4月30日)、「俳句会」(5月7・28日、6月4日、7月2日、10月1日、10月8日、11月5日)、「英語会」(5月9日、6月29日、7月13日、9月14日、10月5日、12月14日)、「お琴」(10月25日)、という記述があり、この文化会は保育と直接関係する内容ではないような講演や俳句、習字やお琴、英会話等が行われ、後援会の保護者も参加していたと推測できる。保育に関連するものでは、「リトミック講習会」(5月16日)に園長が出席、「保育講習会」(8月3・4日)、「師範附属小学校研究発表会参観」(10月19日)、「利島勝雄氏の遊戯講習会」(11月23日)などに参加した。この遊戯講習会では、「会員多数盛会」との記述があり、北九州保育会の講習であったことがわかる。また、他園参観として、「香春愛児園へクリスマス参観」(12月21日)に行っている。

【高梁】では、昭和11年度には、博多市で開催された「中国四国九州連盟総会」(5月1・2日)に保姆3名が出席。19年度には、2名の保姆が「西幼稚園に視察」(6月30日)、「早島幼稚園保姆2名参観」(7月3日)、休園にして「保姆 国民学校へ参観」(7月16日)、「吉備保育会」(11月18日)に2名の保姆が出席という記述があった。

21年には、「東条保育園より保姆2名が見学」(6月28日)、「保姆4名倉敷幼稚園参観」(7月10日)という記録があった。「音楽遊戯講習会受講のため、倉敷幼稚園に出張」(8月16日)、「音楽遊戯講習会」(9月3日)に2名の保姆が出席し「講師は文部次官山田ひかり」で、3日間行われたという記録があった。「豊野隣保館保姆」2名が見学(9月4日)に来ている。その後も、11月28日、1月9・16・17日にも見学に来ている。

【小川】では、15年度には、「全国幼稚園関係者大会」(5月25日)に園長と保姆4名が参加した。全国保育大会打合せや、関西保育会役員会のために、園長が出張していたこと、京都市保育会総会が開かれたことがわかる。「奈良女高師杉田保姆早朝より午後二時まで本園参観さる」(12月17日)とあり、他園からの参観があったことがわかる。

19年度には、「長浜先生の指導の下に松本先生の来園を頂き研究会をなす」(10月13日)、「国民学校一年音楽研究授業及び中原先生四学年音楽教授見学」(10月24日)とあり、国民学校の教師を招いた研究や国民学校の音楽研究会に出席している。「辻、佐々木保母〇〇幼稚園へ午後(保育参観)」(11月29日)という記述があった。「乾隆幼稚園へ感覚遊戯発表会」(3月16日)のため見学に行っている。20年度は、研修に関する記録が少なく、唯一、「豊園幼稚園にて講演あり出席す」(12月4日)との記述があるが、その内容は不明である。

【南山】では、15年度には、「五区研究会」(6月3日と7月16日)に出席、「市保育研究会」(5月23日と7月18日と11月22日)に出席している。「鈴木先生夜行にて関西保育大会」(5月25日)に出席、「桑原様の遊戯講習」(9月4・5日)に参加という記録があっ

た。他園の保育参観として、「神田小川幼稚園」（1月20日）、「女高師附属幼稚園」（1月22日）、「番町幼稚園」（1月28日）、「本郷幼稚園」（1月30日）に出かけたという記録があった。また、「麹町幼稚園にて研究報告発表」（2月5日）という記述があり、頻繁に他園訪問の参観を行っていたことがわかる。18年度は、「本郷中学講堂にて講習会」（6月12・13日）に3名の保姆が出席した。「本郷幼稚園で観察部会」（6月14日）に出席、「鶴巻にて体操会」（8月22日）に3名の保姆出席、9月28日～10月7日まで「保姆講習」（9月28日～10月7日の間）があり、「音楽、図画、救急法、観察、手技」の5会場に分かれて保姆が出席した。また、区の研修では「五区例会」（5月6日）、「五区体育会」（10月29日）に3名の保姆出席、「五区体育講習」（12月13日）に2名が出席している。「遊戯講習会」（1月13・14・17日）に3名が参加した。「小国民文化協会の講習へ社会事業会館」（1月22日と2月5・12・26日）に1名が参加している。

戦後の21年度には、「五区研究会」の記述は見られなくなっている。「教保育委員会」（11月、1月、3月）または「教保育会」に黒門幼稚園へ出席している。「保育総会」（11月28日）に黒門幼稚園に園長以下3名が出席した。また、「合唱の講習」（2月5日）のため本郷第一幼稚園に参加している。本郷第一幼稚園で行われた「遊戯講習」（2月18・26日）に園長が参加した。同じく「本郷第一幼稚園での講習」（2月20日から3日間）に参加した。その内容は「倉橋先生のお話あり」「功刀先生のおはなし」という記述があった。

【堅磐信誠】では、昭和15年度には、「市保姆会の養護研究会」（6月3日）に出席、「市保育協会総会」（6月14日）に4名出席、「保姆大会（双葉幼稚園、瑞穂区）」（10月11日）に5名出席、「遊戯講習会」（月見幼稚園）（11月7日）に参加、「伝馬小学校へ言葉講習会」（11月9日）に参加したという記述があった。また、「女子師範のマンガの講習に行く」（11月30日）、「月見幼稚園での遊戯の講習会」（12月7日）に4名出席、「伝馬小学校での音楽講習会」（同日）に1名出席、「白川小学校に於いて音感講習会」（1月18日）に5名出席、「朝日幼稚園での遊戯講習会」（1月25日）に5名出席、「白川小学校での音感教育及び遊戯講習会」（2月22日）に5名出席、「朝日幼稚園へ音感教育、遊戯の講習会」（3月8日）に4名出席、というような記述があった。様々な講習会に参加していることがわかる。講習の内容は、遊戯が一番多く、次いで音楽、音感教育で、言葉や漫画のこともあった。会場は幼稚園や小学校で行われていたようである。市保姆会では養護研究会が行われたことも記録され、幼稚園でも養護の課題が取り上げられたことがわかる。小学校で取り組まれていた音感教育がとり入れられたりしていた。

19年度には、戦時状況を反映してか保育に関する研究は記述がなく、「午后2時より本派戦時保育所に於いて保育婦の心得について加藤カツ先生よりお話を伺ふ」（9月20日）、「市立第二幼稚園に於いて市保育会解散式に列席し、新たに帝国教育会に入会する」（10月10日）という記述があった。「第二幼稚園に於いて幹事会出席」（1月17日）、その事項

は「保姆の報国隊組織」とある。戦後の21年度には、研究・研修に関する記述が見当たらなかった。

【常葉】では、昭和15年度の日誌には、本園が仏教の園であることから「佛教保育協会例会」への出席や宗派別の「派内全国幼稚園協議会の例会」への出席という記録が毎月のように見られた。研究・研修としては、「午後一時よりレコード遊戯講習会」（10月29日）に出席、「京都府社会教育課主催の紙芝居講習」（11月24日）で京都府師範学校講堂へ出席、「佛教保育協会主催の音感教育講習」（1月25日）で下総幼稚園へ出席、に引き続いて「音感教育の講習」（2月1・15・22日）に出席している。19年度には、「佛教保育協会主宰にて高倉会館に夏期講習会あり 保姆出席」（8月17・18・19日）という記述があったが、講習の内容は不明である。「高倉幼稚園に於て佛教保育協会手技の交換会」（10月30日）に出席した。

戦後の21年度には、「大谷保姆養成所に於て講習会」（9月17日から3日間）があり、保姆が交代で出席していた記録があるが、研修の内容は不明である。「三日間華頂幼稚園に於て賀来先生の遊戯講習会」（1月10日）に保姆2名が出席している。

【江戸川双葉】では、昭和16・19年度の日誌には、研究・研修に関する記述は見当たらなかった。21年度には、研究ではないが、5月に愛育会から「保育状況調査」が来て、それに返事をしている。「阿佐ヶ谷幼稚園に総会の欠席の手紙を出す」（6月26日）という記録や、「一時から新小岩幼稚園で会、愛育会の先生のお話 遊戯、歌」（9月30日）に出たという程度の記述しかなかった。この園での研究や研修についてはわからなかった。

上述のことから終戦前後の研究・研修について各園の記録を比較してみると、終戦前後を通じて共通にみられた研修は、「遊戯講習」が最も多かった。戦前のみの研修内容は、「音感教育」や「手技」などであった。また戦前には、他園を訪問して保育参観を行った園もあったが、戦後には、そのような記述があまりなかった。公立園では、終戦前後ともに所属地域の研修会に参加している。

戦後は全般的に記述が少ないことや研修等の内容が具体的に記録されていないことから、どのような内容の研究・研修を行っていたのかまでは確定することができなかった。また、仏教の園では、終戦前後を通じて、佛教保育協会関連の研修が多かったのが特徴的である。

4. 保育者の思い

保育者の思いは、【高梁】【小倉】【小川】【常葉】には、わずかしか記入されていない。

まず、行事である遠足に関して、【常葉】には、長福寺へハイキングに行った時に「気持ちよき一日をおくる」（15年10月28日）、遠足の時に「新緑目さむるばかりにて空より晴れて気持ちよかりき」（19年5月24日）、「快晴に恵まれて一点の雲もなく午後一時半往復電車にて楽しき一日を送りぬ」（19年6月1日）という記述がなされている。【江戸川

双葉】でも「朝起きたらきらきらと輝いたお天気」「良い遠足が実行出来てうれしかった」(19年5月21日)という記述がなされている。

日常の保育に関わって、【南山】では、15年に「毎年毎に泣く子供の少なくて嬉しい」(4月2日)や「朝から少雨降れど御休みも少なく、嬉しかった」(4月13日)、「出席数よいと嬉しい」(5月2日)、「園訓も相当に揃って言へる様に内容も頭にしみ込んで来てゐて嬉しい」(6月24日)、雨降りが続いた日に「お外で遊ばなくて可愛想」(9月19日)というような記述がみられる。

戦争に関わって、【南山】では15年10月に防空演習があった際に、一時避難後再度警報が鳴ったのに「今日は聞こえなかったせいもあるが、大失敗であった」(2日)、「幼児は来た者より避難室に入る。待機すること実に三時間半、十二時一寸前にやっと解除になる。子供達もほっとした風随分きゅうく屈であったでせう」(4日)と記述されている。

戦争が激しくなってくると、後でふれるように空襲に関する記述も増える。【小倉】では、20年に門司に空襲があった翌朝、「何事もなかったかの様早朝より続々と幼いながらも九州健児の意気を見せて集ひ来り大変うれしかった」(3月6日)と記されている。5月の空襲警報発令時に「憎みても憎みても足らざる敵也今に見よ神の始め給ふ国なるを」(10日)、同じ日に再び警報が出て「無念也」とある。連日のように警報が出される中、「警報下何事もなく一日を送ることが出来たことを感謝」(6月1日)と、警報が出ると帰宅、解除されると登園する状況下でも、保育出来たことへの感謝が記されている。第40回海軍記念日は日曜日であったが、「四十年前を回顧し国民の総力をもやして沖縄戦に必ず勝たん。特攻隊勇士に衷心感謝の念をさゝぐ」(27日)、「敢闘精神發揮にて米英撃滅をまっしぐらに進むのみ」(7月2日)と記述されている。【江戸川双葉】でも、昭和20年の警報発令時に、「折角やるべく準備せしを帰して休む事忍びなく感ぜり」(4月12日)とある。

【南山】では、昭和18年9月に園外保育に出かけた時に暑いとも疲れたとも言わずに歩いている子ども達の姿に、「決戦下の子供と書いた」と書かれている。【常葉】でも、19年7月に、「おおいに銃後増産に吾も人も戦わなければならない。国家の大危機」と記述されている。【高梁】でも、20年7月に「時局いよいよ緊迫空襲頻繁となり一時を争うの時、益々戦時保育の重大さを感じ」というような決意が記されている。

【堅盤信誠】では、19年後半、名古屋も空襲警報の発令を受け戦局が厳しくなる時期に、「大戦果の報道を聞いて身も心も浮き立つ様な気持よさで園に出た。子供達は今日も元気である。戦果の話をするるととても興味深く聞いている。しかし自己から話し出すと言ふ子供もない。(略)子供自身から今の戦局に対して話題を出す様に保姆が日々注意し導きたいと思ふ」(10月16日)、「園の屋根の上を水上飛行機がひくゝひくゝとんで行った。子供は「わー」と声を立て、それぞれ見た事を話しつつ色々々な質問が出た。私たちはこうした質問に自信ある答をしたい。子どもの伸びる力をどこまでも伸ばしたい」(11月11日)

というように、時局下の子どもの姿と保育者の思いを記している。

【江戸川双葉】では、東京都内であるので幼稚園閉鎖令が出されたが、その前後には次のような記述がなされている。「泰明国民学校に於て都教育局より通知を受け園経営協議会に出席する。戦時非常処置として空襲の危険あるに付東京都下の幼稚園の保育を一時休止せしむと申し渡さる。但し必要を認むる場合戦時託児所として更生差支なしとの事なり。事の意外に出席者一同驚きつつありき」「官史のやり方に呆れ」「馬鹿気た処置」としつつ、休止の届出をしながら止むをえない時は保育園として当分間やる方針で、戦時の「困難さ戦を感じり」（昭和19年4月19日）と記されている。江戸川双葉戦時託児所として存続する道を選ぶが、大幅に保育時間や保育内容を変えたりしていないようである。

敗戦の昭和20年8月15日は夏休み中であつたが、【小倉】では「畏くも陛下御詔書洩発せらる」という記述、翌16日には「大東亜戦非痛極りなき終結を見る。陛下の御斬念如何ばかりか。同胞結足国運の隆昌を図るのみ」という記述がある。【江戸川双葉】では、15日には「意外やホツタム会談により提出されたる連合国の提案を受諾、無条件降伏の昭書なりき。等しく泣けり、残無念やる方なかりき」と記されている。翌16日には「空襲其の心配も除れその点重荷を除れし感あるも、敗戦非念去り難く張りつめし心も弛み」とあり、「殊によると伝道の道も拓かれ、我等に有利なる時代とならんかを思ふ」と、キリスト教精神に基づいて幼児教育を行いたいという思いで始めた原点に戻れるのではないかという期待が記述されている。

戦後は、空襲がなくなり安堵したことや、保育ができることの喜びが記されている。

【堅磐信誠】では、20年度の再開後、早朝から登園する「子供の楽しそうな顔に保姆は此の上ない喜びと希望」（11月13日）を感じている。昨日の遊びを一人一人に聞いてみたところ、初めてで「発表の仕方はまだだめでした。たびたび行ふ様になれば子供達も馴れて上手に出来る事でせう」（11月19日）と記されている。「幼稚園ニュース」1号を出した時には、「園と家庭とを結ぶ事が出来てこの上なく良いと思つて居ります」（11月22日）とある。休んでいた子どもが出てきて嬉しかったことや、できるようになって嬉しかったことも記されている。反対にお弁当をなかなか食べなかつたり、いたづらをしたり、騒がしかったりして困ったという記述もなされている。

クリスマスに向けては、「少し無理かとも思はれますが色々と教へて」（12月8日）いて、「そのよろこびの日の為にお歌にお遊戯に懸命の努力を」（12月10日）している。楽しみに待っていたクリスマスには、「バックの絵に見入ったりクリスマスツリーをながめたり、又この間持って行った貯金箱も持って来ました。今までハ戦争中でしたのでゆっくり楽しんだりよこんで眺めたりする時間ありませんでしたのに又そんな心のよゆうも見出せませんでした、今日こうして出来る事ハなんと云ふよろこびでせう感謝でせう」（12月21日）と、再びクリスマスを祝うことが出来る喜びを記している。

1月以降も寒さに負けずに喜んでくることは、「私共にとつてこの上ない楽しさの一つ」

(1月11日)であり、お弁当の時に騒がしくて困ったこと、ラジオ体操で落ち着きなく残念であったことなどが記されている。「今まで美麗式をした事がなかったので子供達ハわからず泣き出すのではないかと思ひましたが案外に良くやりましたし、又うれしさに致していました」(1月22日)と書かれていた。保姆自身の落ち着かない気分が影響するので心の平静を保つことを心がけなければと記している(1月26日)。保護者に見てもらった時には、「知っていたゞけてうれしうございました」(3月1日)とある。「卒業式生の答辞の時、万感胸に満ちて只々幸多かれと祈った」(3月23日)と気持ちを綴っている。

キリスト教の園ということもあって、「伸びゆく子等に溢れる元気、神様どうかおまもり下さいませ」(1月15日)という記述もみられる。

21年には、入園式の日に「毎年より泣く子供もなくわりに親から離れて行く。明日が大変なのでせう。入園した一人一人の子供、園の生活に馴れるまでがどんなに大変なのであろうか。しかしそれが保姆の務であり又何よりの楽しみであると思ふ」(4月12日)とある。その後、泣かないで過ごせたり、親から離れて皆と一緒にいられるようになったりして嬉しいという記述がみられる。遠足の時は「けがも無く無事すませる事が出来本当にうれし」(5月4日)いと記されている。土曜日にその週を振り返って、「至らなかつた数々を迎へる明日の日より一つでも善くつとめませう」(5月18日)、「保姆の気持が落ち着かないと尚の事、あせればだめになります」(5月30日)と反省している。遊んでいる時に「一人もぼんやり立つている子のなかつたひととき本当にうれしく思ひました」(6月25日)とある。天皇が熱田神宮へ来た時には、「尊いお姿を拝し熱いものが込上げて来るのを感じました。これからもつと強く立つて祖国復興に進攻さねばならぬと感じました」(10月24日)と、感激を記している。保育の仕方を工夫し、「マーチによりならぶ事は本当によいと思ふ」(11月14日)という記述もある。この年もクリスマスに関わる記述はしばしばなされている。サンタへのお願いを言った日には、「その発表のうれしそうな顔、どんなにどんなに待つ事のでせう。よい喜びを充分あたへたいものと望んでやみません」(12月4日)とある。クリスマス当日の記録は残されていない。1月に入り、久しぶりに庭で時間を忘れて遊んで嬉しく思ったことや、「先生入れて」と自らあそびに入る様になり本当にうれしい」(1月15日)ことが記されている。「将来の幼稚園教育について色々考へる。五十名の子供は卒業を眼前にひかへて色々へ行ひたい事が胸一杯で気ばかりあせり困ります」(1月24日)、とても仲良く遊び、「つくづくと新学期当時の事をおもひうかべて、目に見えぬうちに伸びて行つた事を痛感いたします」(1月30日)、「お遊戯会の事、一日一日のすぎゆく事のみを考へあせるのみでハ申訳無い一つ一つ最後のしめくり力そゝぎたい」(2月13日)とある。

敗戦後の20年には、【江戸川双葉】でもクリスマスが行われている。12月5日に「園長クリスマスの演芸準備(プログラム)」とあり、その後何回も準備や練習の記述がなされている。19日には「ツリーを飾つた処嬉しがつて眺めていた」「三年振りでの降誕祭」と

記され、23日には「祈りて迎えしクリスマス、初雪に聖められ母子相当出席を見る」と、クリスマスが行えることへの喜びが感じられる記述がみられた。

21年には、「中庭へはだしで下りて困る」（6月27日）というような困ることが記されているが、夏期保育で「元気な顔をみせてくれて本当にうれしかった」（8月12日）という記述もある。園長が入院し、先生が遅刻や欠勤する状況もあって、苦勞しながら保育が続けられ、この年末には「実に多難な一年」「よく乗切ることが出来たこと、神の御加護大なるを知り感謝に堪へず」（12月31日）と記されている。

【南山】では、21年に学校の行事に参加し、話が難しくて騒ぐ子ども達を制するのに苦勞しながらも、「さわぐのも無理はないと思った」（9月25日）と記している。

このように、戦後には、日頃の保育への反省や子どもの気持ちを推し量るような記述もしばしばなされていた。

5. その他—空襲に関して—

空襲に関する備えを、昭和18、19、20年の園の記録から見ていくと、18年11月26日に「空襲警報が家庭に於て発令の場合、登園しないこと、登園途上の場合直ちに帰宅の事。在園の場合は下園する事。解除後も登園しない事」ということを家庭に知らせたという記述が【南山】の日記に見られる。他の幼稚園も概ね類似の状況である。

在園時の帰宅のさせ方については、【南山】と【小川】では、園児を隣組の班ごとに、班長の出迎えで帰宅させるという方針で、訓練も繰り返されていたが、【小川】では、実際の警報発令時（19年7月4日）、「実際に於いて迎えが遅く」、「迎えの遅い隣組は保母が手分けし送る」ことになり「四人では手不足で困った。何らかの対策の要あり」と訓練通りにはうまくいかなかった様子も伺われた。【堅磐信誠】では、「迎えに来られた人より子どもを帰す」ようにしていたが、警報が発令されてから「一時間後もまだ迎ひに来ない」という事態もあり（19年11月1日）、「お迎えの遅い少数の子供を防空壕の中に入れいざの場合の準備をなす」という記述もみられた（11月24日）。【江戸川双葉】では、20年に入ると「近い子どもは帰して遠方の子どもは待機」させたという記述が何度かみられる（2月12日、3月8日）。保育が始まってすぐの警報発令の場合は、そのまま全員待機という日（2月14日、3月20日）もあった。

【南山】【常葉】は、午前中に警報が発令された場合は、解除後も休園との措置をとっていたが、【小倉】【小川】【堅磐信誠】では、朝からの警報が解除後に1～10数名の園児が登園したり、警報発令されて帰宅後解除されて再び登園したりしているという記述が見られた。【小倉】では、早朝5時53分に警戒警報が発令され12時頃解除になったのを「待ち構へて子供達17、8名ばかり」登園した日もあった（20年5月10日）。

【高梁】は警報発令時でも園児を帰宅させることなく、保育を続けていた。20年の退避訓練では、全員が園外へ退避している場合（5月10・23日）と、園児を6班に分け、3

班が園外、残りを園内の防空壕へ退避させている場合（6月18日）があった。7月24日には、「益々戦時保育の重大さを感じ」、「措置方法を刷新」とし、園児を各地域別に5分団に分けて3つの場所で「巡回分散保育」をすることを決めたという記述があった。これは、日誌に紙を貼って、その日の警報の記録とともに書かれていた。その記録は次の通りであった。「午前5時30分 警戒警報発令 5時40分 空襲警報発令 8時52分 空襲警報解除 9時10分 警戒警報解除 10時30分 空襲警報発令 10時38分 空襲解除 10時45分 空襲警報発令 11時4分 空襲解除 12時0分 警戒警報解除 12時43分 空襲警報発令 午後2時52分 空襲解除 3時18分 警戒警報解除 3時54分 警戒警報発令 4時0分 空襲警報発令 5時20分 空襲警報解除 夜間に二回警報入り」。

このような状況下の子どもたちについて【堅磐信誠】の19年度の日誌には、「『いくら沢山敵機が来ても平気だ、皆射落すから』なんて云っていた。ここにも元気な小さな子供の心にも大和魂があるのかと思ったら日本は決して負けないぞと心強く感じた」（11月6日）、「お昼近くになると子供達は空襲を待ちでもする様に『先生今日は敵機は来ない』なんて平気で言っている」（11月28日）という記述もあれば、「サイレンの音を聞き泣き出す子供があった」（11月24日）という記述もあった。

空襲が激しくなってくると、どの園でも登園する子どもたちが少なくなっていった。【堅磐信誠】では、20年1月8日の「始園式」に際して「出席15名というなさけない有様。防空設備の完備した保育を持ちたい」との記述があり、以後、欠席者が50数名～60名と多く出席者15名程度の日が続き、2月17日には「遂に一人も登園せず」と記されている。3月6日には、保姆が欠席の子どもの家を廻ったが「皆警報の為欠席との事」であった。このような状況下、この園は、3月17日の卒業証書授与式以降休園となる。同様に、【小川】【南山】【常葉】は休園となった。【高梁】【江戸川双葉】【小倉】は閉園することなく保育を続けた。

空襲による被害は、【小倉】で昭和19年3月29日に「突然敵機来襲あり 一機らしくも高射砲破片にて水飲み場スレート屋根に小穴あく他はなし」との記述があった。

おわりに

本稿では、7つの幼稚園の記録や聞き取り調査から、終戦前戦後の保育の実際について分析・解明できたことを述べた。終戦前後の比較として、次のようなことが指摘できる。

(1) 行事に関しては、入園式・修了式については多くの園で記録があり、これらは終戦前後に共通して行われていた。天長節・明治節や紀元前二千六百年奉祝行事は戦前に行われた行事であるが、終戦後もしばらくの間は天長節・明治節の行事が行われていた園もあった。仏教やキリスト教の園では、宗教関連の行事には終戦前後に大きな変化は見られなかった。運動会は、体錬会のような時代を反映した名前で行われていた園もあった。

(2) 保育内容に関しては、公立園では具体的な記述が少なく探するのが困難であった。「手技」「歌・遊戯」などは終戦前後に共通して行われていた保育内容であるが、その活動の中身は、戦時を反映している。戦争に関するものは終戦後はみられなくなった。

(3) 研究・研修に関しては、終戦前後に共通して多くの園で参加した講習会として「遊戯講習」があった。また、公立園では、地区の研修会に出かけた。宗教の園ではその趣旨の研修会に、終戦前後に共通して出向いている。音感講習は戦前はあったが、終戦後はあまりみられなくなっている。

(4) 保育者の思いに関しては、昭和19の後半や20年になると、「戦時下の子ども」「戦時下の保育」という切迫した状況での園児の安全に対する苦悩の思いが表されていた。終戦後には、安心して保育できる安堵感、子どもたちが屈託のない園生活ができることの喜びを読み取ることができた。

(5) 空襲については、昭和19年から20年前半にかけて頻繁に発令される空襲警報の下での子どもの安全に対する危機感を抱いて日々を過ごしたことがわかる。今回取り上げたどの地域にあっても、幼稚園でも空襲警報の危機から逃れられない状況下で保育が行われていた実際を明らかにすることができた。

付記

- ① 執筆分担は、「はじめに」「4. 保育者の思い」を清原みさ子、「1. 行事」を榎原菜々枝、「2. 保育内容」「5. その他—空襲に関して—」を寺部直子、「3. 研究・研修」「おわりに」を豊田和子である。
- ② 本稿は、日本教育学会第75回大会（北海道大学、2016年8月）と日本教育学会第76回大会（桜美林大学、2017年8月）において、4名で共同研究発表を行った内容をベースとしている。本研究の調査に快くご協力くださった幼稚園関係者各位に衷心より謝意を表したい。